

## 特集にあたって

岡 奈津子

イルも異なる人々が日本に住むわれわれと同じような悩みを抱えていることに、親近感を覚えるかもしれない。

冒頭で紹介したように、いま日本では出会いの場を提供する結婚仲介ビジネスの需要が増えている。その国際化も進んでおり、外国人花嫁の出身国も近隣のアジア諸国から、旧ソ連・東欧にまで拡大している。こうした結婚の商品化・国際化は日本だけでおこっていることではない。女性が外国に嫁ぐ結婚移民（送り出す側か受け入れる側の違いはあるが）とそれを促す国際結婚仲介ビジネスの興隆は、いまや世界各地に共通する現象である。

情報テクノロジーの発展により、異性と知り合うパターンも変わりつつある。親族や地域共同体のネットワークを利用した結婚相手の紹介は（日本ではかなり廃れてしまったものの）多くの国でいまなお機能している。ただし、そのような伝統的お見合いに加え、マッチングサイトやソーシャル・ネットワークキング・サービス（SNS）を通じた出会いが、先進国のみならず、独身男女の交際に厳格とされる社会にも浸透してい

## ●ロシア美女と結婚しませんか？

「国際結婚を望む美しくセクシーなロシア人女性」「普通の日本人が美人な東欧女性と結婚できません」「ブロンド、青い瞳、透き通るような白い肌」。

これらはロシアやウクライナ出身の女性を紹介する結婚仲介業者のサイトに踊る宣伝の文句だ。営業戦略とはいえ、ここまで彼女らの外見を強調する業者のやり方には違和感を覚えざるを得ないが、これらのサイトをみると、女性会員自身もばっちりメイクにセクシーなポーズで決めた写真で自己アピールしている。年齢や身長、離婚歴や子供の有無（時には目や髪の色まで！）などの条件を設定して検索できるのはもちろんのこと、女性の「アクセスランキング」を表示したり、スタッフが「おす

すめ」会員を選別したりする業者もいて、さながら花嫁候補のネットショッピングである。

他方、これらの結婚仲介業者は日本人男性に、たとえあなたがイケメンではなく、もう若くなくても、きつとパートナーがみつかりますよ、と入会を呼びかける。内気で異性にモテなくても、とりたてて金持ちでなくてもいい。まじめにきちんと働く日本人男性は、一步国外に出れば結婚相手としての市場価値が十分あるというのだ。こうした勧誘の言葉の端々に、そもそも日本の女たちは高望みばかりしている、という男性の不満も垣間みえる。

日本人男性は安定した収入、ロシア人女性はやヨーロッパ的容貌。それぞれの国では平凡なものであっても、相手の国ではより高く評価され、結婚市場において大き

な武器となる。お互いが相手の求めるものを提供しているという点で、この組み合わせは需給が一致しているのかもしれない。なおウクライナでは今年二月に起きた政変以降、依然として緊迫した情勢が続いている。安定した生活を手に入れるためにウクライナ脱出を目指す女性の数は、今後ますます増えるのではないだろうか。

## ●変わる男女の出会い

誰とどうやって知り合い、どのように結ばれるか。これはきわめて個人的な問題であると同時に、それぞれの社会のあり方に深くかわる問題でもある。本特集ではアジアから中東、アフリカ、ラテンアメリカまで、世界各国のさまざまな結婚事情を紹介する。読者は異国の慣習について新しい発見をする一方で、言葉もライフスタ

る。他人の目に触れないこうした出会い方は、男女交際に保守的な社会で暮らす若者にこそ重宝されるのかもしれない。

### ●結婚難の背景

改めて指摘するまでもないが、いま日本では結婚しない男女が年々増加している。婚外子が法的にも社会的にも差別され、出産が結婚とほぼセットになっているわが国では、子供の数が減っている最大の要因は未婚率の上昇にあるといつてよいだろう。少子高齢化による労働力不足や社会保障シテムの崩壊を懸念する政府や自治体は、あの手この手で若者に結婚を促そうとしているが、あまり成果はあがっていない。

非婚化が進んだ背景として、若年層の就職難や非正規雇用の増大が第一の理由にあげられるが、この問題は男性にとつてより深刻である。共働き家庭が増えたとはいえ、一家の大黒柱として男性が主に生活費を稼ぐべきだという社会通念はいまも根強い。女性は結婚相手に一定の経済力を期待するため、家族を養うだけの収入がないと、男性はなかなかパートナーがみつからない。

経済的理由による結婚難は、本特集が扱っている発展途上国においてより深刻である。結婚相手やその家族への贈り物、婚資や持参金、挙式、住居をはじめとする新生活のための費用負担が、そうした慣習を重視する社会においてより重くのしかかる。一連の儀式をきちんと執り行つてこそ、晴れて正式な夫婦と認められるところでは、「ジミ婚」という選択肢はなかなか選ぶことはできない。

また、働き口がなく外国に出稼ぎにいく若年男性が増えると、女性が国内でパートナーをみつけることが難しくなる。これに対し女性の場合は、より生活水準の高い国の男性と結婚することで貧困から脱出するという道もある（実際には嫁ぎ先で生活が楽になるとは限らないのだが）。

なお女性の高学歴化・社会進出にともなう晩婚化・非婚化も、程度の差はあれ、国境を越えて観察される。酒井順子氏の『負け犬の遠吠え』（講談社）が注目を集めたのは一〇年ほどまえのことだが、都会でバリバリ仕事をしている女性が、さまざまな理由でなかなか結婚しないというのは、本特集で取り上げた国々にもあてはま

るところがある。母親世代が経験したような嫁・妻としての苦勞をしたくないというのも、結婚を先延ばしにする理由のひとつだろう。他方、一般に女性は収入や学歴がより高い相手と結ばれる上方婚が望ましいとされるため、学業やキャリアを優先すればするほどふさわしい相手を探すのが難しくなってしまうのも、多くの社会に共通するようだ。

### ●結婚をめぐる規範と慣習

とはいえ、世界の国々には結婚にまつわる多種多様な慣習が存在する。また多くの途上国では先進国に比べ、男女交際や結婚に関する文化的・宗教的規範がより強く維持されている。女性は結婚するまで純潔を守らなければならないというのも、その一例だ。一般に先進国では、結婚はどちらかといえば個人の選択とみなされ、基本的には本人同士の意思が尊重されるのに対し、途上国では結婚は花婿と花嫁、それぞれの親族を姻戚関係によって結びつけるものである、という意識がより強い。そのため、出身階層や家柄など両家の釣り合いが重視され、そうしたルールを逸脱した結婚は周りから

祝福してもらえないばかりか、親族から絶縁されるリスクもある。

一夫多妻や若年婚、家族間で女性を交換する交換婚、気に入った女性を連れ去る誘拐婚など、女性の意思および権利の尊重という観点からしばしば問題視される慣習もある。しかし本特集でも触れられているとおり、こうした慣習はそれぞれの社会においては一定の合理性を持っていたり、当事者である女性自身が戦略的に使つていたりする場合もある。その「後進性」を断罪する前に、人々の具体的な行動と考えを知る必要があるだろう。

結婚に関する通念や慣習は「伝統的」とされる社会においても常に変化している。本特集に描かれたさまざまな結婚のあり方も、近い将来、いまとは少し違った形をとっているかもしれない。

（おか なつこ／アジア経済研究所 中東研究グループ）